

意思の集積はやがてまちを創る

横浜国立大学大学院 都市イノベーション学府修士1年 南 拓海

## 住むことに期待していなかった私、籠る日々

新学期が始まる1週間前、突然大学が封鎖された。誰とも出会うこともない。

不要不急の外出を避けてください。三つの密を避けてください。

緊急事態宣言が出される直前に、何とか関東から実家に疎開し、1ヶ月も散歩をした後、画面越しに初対面の人とエスキースをする日々。

特段、大学院を楽しみにしていたというわけでもなかったし、横浜での一人暮らしだったとしてももう6年目だし、どちらにせよ、無機質でニュートラルな暮らしに嫌気がさしていた。

一人暮らしというものは孤独だ。都市であるから壁に囲われていて、窓もおおびらに開けられず、六畳一間の部屋で籠らなければならなかった。しかも、拙者、院試験で浪人をし、そんな状態で社会から隔絶される経験は大変に地獄だったし、人間っていつも簡単にひきこもりになれるものだなと思った。楽しみも何もない、そのような暮らしは、確かにものや情報がたくさんあることに憧れていた田舎の高校生だったころ頃には魅力的に見えていたものの、結局のところ実体として何か得られているようには思えなかった。

況してや、遠隔授業で課題が出され、家にいても何かやらなければならず、自室すら決して安息の場には思えないし、かといって外に出るのもリスクだし、せいぜい田舎の書店に出かけて、知識として本を読み漁ることができたくらいで、これほどつまらない状態はないと感じていたのだ。誰かと暮らすとか、どこで暮らすとか、そのようなものにも期待していなかった。

## 祖父と暮らした丁寧な暮らし、風景を添えて

コロナが少しおさまってきた頃、大学院の課題で、実家にて遠く長崎のことを調べていた私は、ここでは何も情報を得られないし、窮屈だし、いてもたってもいられなくなり、長崎の祖父の家にこもろうと出て行った。どちらにせよ、大学院は全てオンラインなんだから、いい環境にいた方が良くは決まっていると思ったし、インターネットで得られる情報なんて

今や何かに引き込むための無料の情報しか載っていないのだからどうしようもない。

本当は移動なんてしていいかなんて世間的には若干怪しかったけれども、人間のフラストレーションというものはよく反動で身体を動かしてしまうものだ。

コロナ対策以外は特に何も考えず、がら空きの新幹線と、特急かもめに乗って、新しい長崎駅に着く。

それからバスに乗って、山に登って、祖父の家に着く。

長崎の祖父の家に着くと、そこには変わらず足が悪いながら懸命に一人暮らしをする祖父の姿があった。

去年、祖母を亡くし、今は県内に住む叔父さんが週末に買い出しのために来たり、ヘルパーの方が週一回来たりして、なんとか生活が成り立っていた。山の上に住んでいて、免許も返納し、バス停も少し遠い。タクシーが足代わりだけど、玄関から道路までの通路は緩やかな傾斜で下がっており、手すりを設置して通路に手すりを付けたとはいえ、転ぶと危険な状態ではあった。到着すると祖父は喜んで出迎えてくれた。

当たり前だけど、祖父の家で暮らしていると祖父の影響を受けることになる。

祖父の生活に合わせて早起きをし、木の音が響く階段を降りて、必ず縁側と台所側の窓を明けてから、朝ごはんも一緒に食べる。毎朝ちゃんと野菜を切ってまな板の音を響かせることから始めて、サラダが朝から食べられる。昼ごはんも夜ご飯もだいたい一緒に、私が若者だからか、結構量を買って入れて、食べきれんからと言って、その分が私のものになって、食トレも始まっていた。ふと見える縁側から見える庭や借景の山の濃い緑が美しい。緑の庭で洗濯物を干したり、風呂の掃除をしたり、いろんな手伝いはしなければならなかったけれども、それがいい気分転換にもなっていた。畳の二階で作業をしていると、下から祖父の大きな声が聞こえてきて何事だと思ったら、NHKのテレビの体操番組が始まっていて、一緒に運動をしていた。ここでは、ゆっくりではあるけれども丁寧な暮らしが成り立っていた。6月だったので九州を襲った大きな台風が来て、ものすごい量の雨水が山から排水溝に流れ、大丈夫かなと思いつつ、それすらも豊かに思いつつ暮らしていた。面白いことに、山の上で一緒に暮らしていると、いろんなことがわかってくる。もともと祖父母がやっていた庭の小さな畑は今も近所の親戚の方が作業をしていて、休日にはがものすごい量の野菜をくださって、それが朝ごはんのいつものサラダに変わることがあること。ヘルパーの人の中に料理が上手な人と微妙な人がいて、どちらの人が料理の日に来るかなんと思っていること。祖父にはたくさんの知人がいて、とにかくガラケーや固定電話でいろんな人に電話し、楽し

んでいることは、セーフティーネットワークを築いているのだなとも感じられた。

幸い、退職間際にパソコンを始めた祖父の家にはインターネット回線も wi-fi もあって、授業やエスキースを受けるのには困らなかった。むしろ、祖父の方が、「テレワークってテレビでも言ってるけど、どんなのかわからんから見てみたいね」なんて社会情勢や私の今の状況に関心を持っていて、テレワークを教える会なんている、学びあいの場が発生した。

とはいえ、あまり長居すると祖父にも負担になるし、必要なリサーチを終えたら、またニュートラルな暮らしに戻ることは残念だと思っていた。

そんなある日、助手から連絡が入って、長崎研究をやるのであれば、ぜひ紹介したい人がいると連絡が入った。とりあえず紹介するから、あとはメッセージャーでやり取りしてと。そこで出会った人々が、私の人生を変えるようになるとはその時点では思ってもいなかった。

繁華街の商店街の、なるべく人が賑わっていない、がら空きのファミレスに集合することになった。そこには半袖半パン、青いキャップがとても特徴的な、公務員特有のあの堅さは全く感じない市役所勤めの方と、いかにもデザインやってますというアトリエ事務所の若い所員さんが現れた。

知りたいことはあらかじめ伝えていたので、いろんな資料を持ってきてくださっていたり、タブレット片手にプレゼンまでしていただいた。

そんな中、いつまで長崎いるの？という話になって、特に決めていなかった私に、

「う～ん、長崎研究なら住むと良いね。ところで、洋館を改修したシェアハウスがあって、建築のプロジェクトしている人も住んでるんだけどどう？」

「その方がいいんじゃない、道具も揃っているし、広いし、模型作業もできるよ。」とめっちゃくちゃ推されることになった。

いったん実家に帰ってニュートラルな暮らしに戻るより何かありそうだし、また初盆のために長崎に来るより安く住むし、どちらにせよ夏に長崎に戻ることになるので、下手に動く、高齢の祖父への感染リスクも高まるから長崎にいた方が良いね、ということになり、そんな訳で、1週間後入居の書類を整えて、長崎のシェアハウスに転がり込むことになった。

### まちに入りこみはじめた私、人々に恵まれて

シェアハウスは、元洋風住宅（とは言っても、和室なのだが）であった。シェアスペースの

居間は8畳、6畳が連続していて、半分はその所員さんの方、もう片方は私ができることになった。天井高が2400もあって、おまけに斜面上に建っているの、縁側からは、ひらけた景色が見える。畳の床にはサンプルやテクスチャ、建築の本が広がっており、いかにもという感じであった。

すぐ近くには斜面住宅を長年研究されている方がいて、お話を伺うことができたり、そこから人伝で、近くで若い人が斜面住宅の空き家を再生していると聞き、その方の取り組みを聞いたたり、少しだけ訪れたりすることができた。

大学院のエスキースの進捗はオンラインで。当たり前だけど、長く滞在できる分調査なんか捗るに決まっている。しかも、オフラインと違って必要なアドバイスも戴けるから、これほど良い環境はなかなかない。

ましてや、住宅一つにしても実際に住んでみると全然違うことがよくわかる。斜面住宅と普通の住宅では全然違う。



例えば、向こう側の景色が見えて、夜は夜景のように住宅が輝くとか。目の前の中学校のグラウンドは上から見下ろすように見ることができて、やたらテニス部だけが朝練をやって賑やかになっているとか。石畳の車道に大きな車が通ると、築100年越えの住処は振動でガタガタと揺れてしまうとか。湿気もこもりやすく、雨が降ると、斜面側の雨水は上から流れ込み、崖と差し迫った外壁との狭い空間の中で激しく響くとか。

住んでいたり、じっくり調べていると、斜面住宅群での生活も全然違うことがわかった。我々は、長崎の斜面住宅地を見たときに、魅力としては斜面の路地を見がちだけれども、住んでいる人から住むと斜面方向の移動は不便で、むしろ、横方向に繋がれるなら、圧倒的に

横方向のコミュニティが栄えるなど、意外な点は多かった。

シェアハウスの一階は単にシェアハウスの住民のものではなくて、運営するオーナーの方や、その周辺のまちづくりに携わる方が時々やってきては、突然宴会になったりした。

偶然、シェアハウスの改修のお金を出している方が、自分が調べたい地区のまちづくりを担っている方で、実際に精霊流しのもやし船作りの参加させていただくことができ、地区の調査でもあり、文化を経験する、いわゆる参与観察なんでものも自然とできてしまった。

そして、あまりに充実しすぎていつだったか忘れてしまったけれども、まちづくりスナックなんでものが自主運営されていることも教えていただいた。

まちづくりスナックというものは、雑居ビルの3階、元は本当にスナックだった場所を、屋号だけそのまま、まちづくりに関わりたい人があ集う場所にして、自主運営している。営利を目的としておらず、お酒も持ち込みバーテンダーごっこもできる。時折、モニターで外部と繋いで、仕事の打ち合わせであったり、オンラインのイベントで役立っていった。

そこでは、本当にいろんな人と出会った。見知らぬ公務員の方から、近くの大学生、仕事を辞めて長崎をPRするYoutuberを目指す人など、個性あふれる人が来ていて、まちづくりのイベントに誘っていただいたりした。長崎という異国情緒あふれるところで、地区のPRと医療従事者へのメッセージのために、オランダ坂を背景にライトペインティングをして楽しんだりした。美味しい五島うどんのお店があって、その人とも話せるくらいにもなった。

こうして、外の人を、こんな時代の最中、受け入れる地盤に運良く巡りあえて、私の生活は一変した。今考えると、そこには、住むこととまちが殆ど離れておらず、密着していて、それがいろんな文化が混ざっている長崎と相まって、一つの大きな世界を作っていたのだと思う。そして、そのような環境に入れる受け皿があったからこそ成り立ったのであると思う。

### まちに還元しようとした私

課題を提出し、夏休みに入った。シェアハウスは一旦退去することになったが、建築家のプロジェクトにも少し携われそうということで、夏休みも同じシェアハウスにて長崎で過ごすことにした。

夏休みに入ると、シェアハウスには新しい住人が入ってきた。都内で勤めていたが、卒業設

計でやった長崎のことが忘れられず、仕事を辞めて長崎に住むことを決意し、とりあえず、移住だけ決めた人であった。本当にこの場所は、この地域を愛する色々な人の受け皿になっているのだなあと感じた。元の住人は建築家の所員さんと、建築学生の私であったので、期間限定建築シェアハウスが誕生することとなった。

所員さんは遠慮なく模型を広げることができ、シェアスペースはみんなの作業場になった。私も時々お手伝いをして、作り方を学びながら、ちょっとだけ家賃の足しにした。

あるとき、例の市役所の方から声をかけていただき、休日のまちづくりの一環（その方は本業もまちづくりで趣味もまちづくりなのである！）として、せっかくなので展示して欲しいとのことだった。

実はシェアハウスはまだ改築途中で、実際に味気ない天井を長崎特有の模様に変えようという話が上っていて、夏休み前、天井を計測しっぱなしであった。

全員がやらなければならない仕事を抱えていたので、全員が揃うことは意外と少なかったけれども、なんとか頑張ってシェアハウスの改築案を実測から頑張って、展示することもできた。ご厚意で自分の課題も展示することができ、良いフィードバックが得られたことと思う。それから、建築のプロジェクトにも参加して、海辺で竹を燻すための大きな釜をつくることを手伝うことができた。その他、まちのために時々行事を手伝ったりして、楽しみながら、何か還元したいと思うようになった。



そして、私は将来、長崎で建築をやろうと決意した。今は大学院生として遠く関東に住んでいるが、少しでも知識や技能を携えて、長崎に戻り、ゆくゆくは、誰かこのまちに住む人の受け皿を作る番になりたいと思うようになった。

## 総括：

「私たち」が本当に暮らしたいまちや住まいというのは、ある意味、すごい都市計画的な視点だ。「私たち」なんて総意はどこからなのか。果たしてそもそもそのようなものはあるのだろうか。

これからの時代、リモートワークなんて言葉も流行ってきて、働くということが必ずしも強制的に都市に固定されなくなっている。そのような時代に於いては、「私」が本当にここで暮らしたいという意思が集積し、「私たち」が暮らしたい一つのまちが出来上がるという可能性は十分にある。それは、遠く離れた祖父の面倒を見たいとか、この町の行事に共感し参加してみたいという、ある一人の人間が、そのまちや人々に出逢った時に沸き起こるパッションから決まる時代になっていき、ゆくゆくはまちそのものを大きく変えていくことも十分考えられるのだ。こういうことが始まるためには、何か受け皿となるものが必要で、元を辿れば誰か一人でも強烈にこのまちに住みたいという意思があって、それを共感させていく仕組み作りが必要だと思う。

誰かがストックの如くものを置き、誰かが使う、みたいな姿ではなく、自分たちが町をつくり、住み方を考えていくような意思の集積がまちになると強く感じている。

わざわざお題批判なんて、野暮かもしれないけど、そういう思考や実践をする人間もいるのだということを、長崎で出会った人への感謝も込めてここに書き残す。